

---

# シークレットゲーム ~ subversive elements ~

プクプク

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

シークレットゲーム ～ subversive elements ～

### 【Nコード】

N9208X

### 【作者名】

プクプク

### 【あらすじ】

出口の封鎖された建物へと連れてこられた13人のプレイヤー。彼らが参加させられるのは、己の生死を懸けたゲーム。ルールを守り、限られた時間内に首輪の解除条件を満たさなければ、首輪の作動によって殺される。生き残るためには、PDAに書かれた常識では考えられないことを成し遂げなければならない。命懸けのゲームが今、その血に塗れた幕を開けた・・・

## 第1話 少年と少女（前書き）

この小説はシークレットゲーム（キラークイーン）の二次創作小説であり、『シークレットゲーム』KILL or DIE』をエピソード1としたときのエピソード2にあたります。

登場人物はエピソード1と変わりませんが、細かい設定は変わったりしています。

互いが互いのネタバレを含んでおりますので、どちらから読んでもらっても、片方しか読まなくても大丈夫・・・なように書きたいと思います。

もちろん私個人としては両方読んでもらいたいですが。

原作とは一部のルールや首輪の解除条件が違いますので、ご了承ください。

ご都合主義や主人公補正があったりしますが、そちらも黙認していただければと思います。

以上のことが大丈夫だという方は、どうぞこのまま本文へお進みください。楽しんでいただければ幸いです。

## 第1話 少年と少女

『それではみなさん、よいお年を〜!』

年末恒例の紅組と白組に分かれて競い合う歌番組が終わりを告げる。

「いよいよ今年も終わりねえ」

母さんがしみじみと呟く。

「そうだな、今年もいろいろあったが、明日からは新年だ。3人も、気持ちを一新して新年を迎えよう」

父さんがオレと兄貴の肩を軽く叩きながらそう言う。

「そつだぜ兄貴、いつまでも修学旅行の時のことを引きずってんな  
「よ」

本来修学旅行に行っていたはずの間、兄貴はどこか知らない建物に幽閉されて、殺し合いみたいないなゲームに参加させられたらしい。そんなことがあり得るのかと思ったが、兄貴がそこで撮ってきた写真から、オレはそれを信じざるを得なかった。

「・・・そつだね」

「ん？ 彰あきひ、修学旅行で何かやらかしたのか？」

「いや、そうじゃないよ、父さん。ただもうちょっと楽しみたかったなっただけ」

オレはそのことを警察や両親に相談しようと言ったが、兄貴は両親に心配を掛けたくはないからと言って、そのことをオレ以外には言わなかった。オレには心配させてもいいのかよ、とか思ったが、兄貴曰く、オレにも気を付けておいてほしいから、だそうだ。

ちなみに、オレたちは本当の両親とは既に死に別れている。その後しばらく孤児院で暮らしていたが、4年前に今の両親に引き取られた。

「はははっ。そうか、まだまだ遊び足りなかったか」

「でも、受験が終わってからね。そうしたら、またみんなで出かけましょう」

「そうそう。受験が終わったら、パーツとお祝いをやってやるんじゃないか。彰の合格祝いと、2人の学校卒業記念にな！」

「いや、父さん、まだ僕は合格したわけじゃないから」

「大丈夫さ、彰ならな。これが齋こいつなら心配だが」

「あ！ 父さん、俺を馬鹿にすんじゃないやねぞ！ これでもテストで100点取ったことがあるんだからな！」

「おお、そうか！ 齋もやればできる子だったんだな。いつも外で駆け回っているイメージがあるから、ついつい遊んではかりなのか

「思ったぞ」

「そんなわけないだろ！ オレは文武両道なんだ！」

「そうか、なら、うちの子は二人とも優秀だな」

「あつたり前だ！」

「まあまあ、2人ともじゃれあうのはそれくらいにして、もう年が明けるわよ」

時刻は既に23時59分を過ぎていた。

「そうだな、初水を汲む準備をしなければ」

父さんはそう言っていていそいそとシンクへ向かう。オレは兄貴と母さんと一緒に、テレビの前で年が明けるのを待った。

そして、時計の針が深夜の零時を指すと同時に、テレビから明けましておめでとつうの音が聞こえる。

「彰、斎、明けましておめでとつ」

「うん、母さん、明けましておめでとつ」

「明けましておめでとつー！」

その後は家の近くの神社に初詣に行つて、深夜2時ごろに寝て、朝起きておせち料理を食べ、一日中テレビの前でだらだらと過ごした。次の日も同じように、朝には昨日のおせちの残りを食べ、兄貴は勉

強するために部屋に戻ったが、オレは再びテレビを占領して一日を終えた。

だが、幸せな日々はそこまでだった。その日の深夜、家が火事になった。決してオレや兄貴、ましてや、父さんや母さんのせいではない。誰かに放火されたのだ。それも、わざわざ両親の寝室の真横に。結果、両親はオレと兄貴の目の前で命を落とし、オレたちだけが生き残った。

また、オレたちだけが生き残ってしまった。

・ ・ ・

オレの夢はそこで終わった。理由は簡単、オレが目覚めたからだ。

「ん・・・、ふあ・・・」

体をほぐすために、軽く伸びをする。

たまに、こんな風に昔のことを夢に見ることがある。その度に、オレはそこからのことも思い出す。

その後、どこかから現れた身元受人に、兄貴は進学を諦めさせられ、就職することになった。当時、その人の目を盗んで、兄貴はオレにその人が以前の組織の関係者だということを伝えた。きつと、

放火も組織の仕業だったのだろう。だが、身元引受人を組織側に押さえられた以上、オレたちにできることは何もなかった。

オレは一人暮らしをすることになり、兄貴は組織で働く、つまり、ゲームに組織側の人間として参加させられることとなった。

オレの地獄の日々はそこから始まった。

不定期に、オレのもとに兄貴が人を殺すところを撮った写真が送られてくるのだ。オレは躍起になって組織の尻尾を掴もうと足掻いたが、ただの無駄骨だった。しばらくしてその写真も送られてこなくなり、オレは進学を許されていたため、志望校を目指して勉強した。

そして、オレは志望校に見事合格することができ、今ここにいます。

「……って、ここは……?」

てっきりいつもの如く、授業中に居眠りでもしていたのかと思っただが、そうではなかった。

かといって、家にいるわけでもない。

ここは、以前に見せてもらった兄貴が撮ってきたゲームが行われた場所に酷似していた。

全面がコンクリートの壁に、同じくコンクリートできていて敷物の一切ない床。埃っぽいわけではないが、薄汚いベッド。

それに……

「・・・やっぱりか」

首には首輪が、机の上にはPDAが、それぞれ兄貴の写真通りあった。

とりあえず、オレは唯一の手がかりであるPDAを手に取ってみる。画面には、クラブの4が大きく表示されていた。その下にボタンがあったので、それを押してみると、画面が切り替わり、『ルール』、『機能』、『解除条件』という文字が表示された。

「・・・上から順に見ていくか」

まずはルールの文字に触れる。すると、画面に合わせて4つのルールが表示された。

<ルール1>

参加者には特別な首輪が付けられている。

それぞれのPDAに書かれた条件を満たした状態で、首輪のコネクタにPDAを読み込ませれば外すことができる。

条件を満たさない状況でPDAを読み込ませると首輪が作動し、15秒間警告を発した後、警備システムと連携して着用者を攻撃する。

<ルール2>

参加者には1〜9のルールが4つずつ教えられる。

与えられる情報はルール1と2と、残りの3〜9から2つずつ。およそ5、6人でルールを持ち寄れば全てのルールが判明する。

<ルール5>

侵入禁止エリアが存在する。

初期では屋外のみ。

侵入禁止エリアへ侵入すると首輪が警告を発し、その警告を無視すると首輪が作動し警備システムに殺される。

また、2日目になると侵入禁止エリアが1階から上のフロアに向かって広がり始め、最終的には館の全域が侵入禁止エリアとなる。

<ルール7>

開始から6時間以内に人に危害を加えると、危害を加えた者の首輪が作動する。

過失や正当防衛は除外。

まず1つ目には主に首輪の外し方が、2つ目にはルールが全部で9つあることが、3つ目には進入禁止エリアがあり、そこに一定時間以上いると首輪が発動することが、4つ目には開始から6時間以内は人に危害を加えてはいけないということが書かれていた。

次に、1つ前の画面に戻って、今度は機能の文字に触れる。その中からさらに文字が浮かび上がったが、現在そこにあっただのは『地図』という文字だけだった。それをタッチすると、異常に広い地図が展開された。画面に入りきらず、手で動かしてようやく全体を見ることがができる。

・・・と思ったら、拡大、縮小機能がついていたので、オレは画面に地図が入りきる大きさに設定した。

今は必要なかったたので、再び前の画面に戻り、最後に解除条件の文字に触れる。

「解除条件・・・、4名以上の殺害？」

そこに書かれていたのは、常識では考えられないことだった。だが、既に兄貴のことで多少ながら事情を知っていたオレは、こんな条件があってもおかしくはないと思った。

追記で手段は問わないと書かれているが、これはどういうことだろうか？

よくわからなかったたので、とりあえず放置しておくことにする。

「さて・・・」

これからどうするか、そんなことは決まっている。

「よつやくオレの番か。何としてでもここから生きて帰って、お前たちの悪事のすべてを暴いてやる・・・!」

オレはその思いを胸に、まずはルールを全て確認するため、他の参加者との遭遇を目的に建物の中を歩き始めた。

「誰もいないな・・・」

さすがに広すぎるのか、もうかれこれ30分は歩いているが、オレは未だに誰とも会えていなかった。

「先にも向かうか？・・・いや、やめておいた方がいいな」

おそらく今2階以上に行くと、他のプレイヤーと接触する確率はかなり低くなる。できれば開始から6時間以内にすべてのルールを把握しておきたいので、オレはこのまま歩き続けることにした。

その後も歩き続けていると、オレはホールのようなところに出た。

「随分と大きなホールだな。元々は何かの会場だったのか？」

外に出ればここがどんなところか少しはわかるかもしれないと思っただが、残念ながら入口にはシャッターが下りていた。

「ん、あそこだけ壊れているな・・・だが、その先はコンクリー

トで埋められているか」

一か所だけシャッターが壊れている場所があったので、そこへ行ってみたが、その向こう側に見えていたのは他と変わらないコンクリートの壁だった。

「まあそうだろうな。ここから逃げることができるのなら、殺し合いになどならないしな」

オレはそこから立ち去ろうとして、そこで声を掛けられた。

「ねえ」

「っ!」

突然の出来事に動揺し、オレは勢いよく振り向いた。

「きゃあ!」

オレが急に後ろを振り向いたからか、いつの間にかオレの後ろまで来ていた少女が驚いて尻餅をついた。

「・・・いくら戦闘禁止期間中だとは言っても、もう少し用心した方がいいな。」

気の抜きすぎているとルールを知らない奴にいきなり殺されかねない。

「悪い、大丈夫か？」

オレはそう言って、倒れた少女に向かって手を差し出した。

そのついでに、オレは相手を軽く観察してみる。身長はそれほど高  
くなく、とくに運動をしているような体つきには見えない。俺と同  
い年くらいで、髪はダークブラウンのセミショートだ。

・・・武器さえ持っていなければ、こいつにやられることはまずな  
いな。

「あ、ありがとう」

少女はその手をすんなりと握って立ち上がる。

「急に後ろ振り向くからびっくりしちゃった」

「悪かった、次があれば気を付ける」

「ふふっ、そうね、そうして」

少女は立ち上がった後、軽く服をはたいて、自己紹介をした。

「私は千島泉希ちしまみず希っていうのよろしくね」

「ああ、よろしく。オレは村崎齋むらさき さいだ」

「ふーん、村崎君って言うんだ。それで、こんなところで何してた  
の？」

「特に何かをしていたわけではないが、強いて言うなら人探しだな」

「人探し？ 誰かとはぐれちゃったんだ？」

「いや、そういうわけじゃない。千島みたいなオレ以外のゲームの参加者を探していたんだ」

「え？ ゲームの参加者？ 私が？」

「ああ。首輪がついているから、おそらくそうだろう」

オレは自分の首輪を示しながらそう言った。

「首輪……、あ、あった。これのことね？」

千島は自分の首のあたりをまさぐって、首輪を確認した。

「おそらくそうだろう。オレは自分の首輪を見たわけではないから、確かなことは言えないがな」

「それで、これってどんなゲーム？」

「詳しくはPDAに書いてあるが、要は生存を賭けた殺し合いみたいなものだ」

「え……、こ、殺し合い！？ ……ていうか、PDAってどこにあったの？」

「ん、オレが寝かされていた部屋にあったが？」

「私それ持ってない……」

「なんだと!？」

「い、いや、そんなに驚くことかな・・・」

「これがないと首輪が外せない。そして、首輪が外せないということとは死を意味する。これでPDAを持っていないことの重大さがわかったか？」

「私、今すぐ取りに戻る」

「オレもついて行っていいか？」

「うん、いいよ。こっち!」

そう言って、千島はオレが来た方とは逆の通路を示してそちらへ向かって走り出し、オレはその後について行った。

## 第1話 少年と少女（後書き）

掲載しておいてなんですが、一か月以内に大事な試験があり、その後には中間試験があるため、それらが終わるまではあまり頻繁には更新できないと思います。

一週間に1話くらいは更新できるように頑張りたいと思いますので、気長に待っていただければと思います。

## 第2話 知るが故の過ち（前書き）

とりあえず既に書き溜めてた分をちょこちょこ掲載していきます。

## 第2話 知るが故の過ち

「よかった！ まだあった！」

オレたちが入った部屋には、1台のPDAが置かれていた。

「持っていていかれていなくてよかったな」

「うん！ ありがとね、PDAのこと教えてくれて」

「気にするな。それに、オレはそれに書かれているルールが知りたかったからな」

「ルール？ ちょっと待ってね・・・、あ、これのことだね。うーんと、1と2と3と9が書かれてるみたい」

「そうか。なら、3と9を教えてもらえないか？」

「・・・う、うん・・・」

「なんだ？ どうかしたのか？」

「いや、ルールに物騒なことがいっぱい書いてあるなって思って・・・」

「確かにな。だが、ここに連れてこられて、こうして首輪やPDA

が用意されている以上、それらが嘘だと笑い飛ばすことはできないだろう」

「そうだよね……。っと、ルールね、はい」

読み上げてくれるだけでよかったのだが、千島はPDAをオレに差し出した。

「……少し借りるぞ」

<ルール3>

PDAは全部で13台存在する。

13台にはそれぞれ異なる解除条件があり、ゲーム開始時に参加者に1台ずつ配られている。

この時のPDAに書かれているものがルール1で言う条件にあたる。

他人のカードを奪っても良いが、そのカードの条件で首輪を外すことは不可能で、

読み込ませると首輪が作動する。

あくまで初期に配布されたもので実行されなければならない。

<ルール9>

それぞれのカードの解除条件は以下の通り。

- A 2日と23時間他のプレイヤーを傷つけない。罠にはめることは可。なお、このPDAのみ館内のすべての罠の位置がわかる。
- 2 JOKERのPDAの破壊。また、PDAの特殊効果で半径1メートル以内ではJOKERの偽装機能は無効化されて初期化される。
- 3 首輪とPDAを合わせて7つ以上取得する。ただし、首輪は最低でも2つ必要。
- 4 4名以上の殺害。手段は問わない。
- 5 館全域にある24個のチェックポイントを全て通過する。なお、このPDAのみ地図に回るべき24のポイントが記載されている。
- 6 JOKERの機能が5回以上使用されている。自分でやる必要は無い。近くで行われる必要も無い。
- 7 総計60時間以上他のプレイヤーに姿を見られない。姿を見られた場合、1時間以内に相手を殺害すれば免除。
- 8 自分のPDAの半径5メートル以内でPDAを正確に5台破壊する。手段は問わない。6つ以上破壊した場合は首輪が作動する。
- 9 「ゲーム」の開始から6時間目以降で、12時間以上行動を共にした人間1人以上の殺害。
- 10 5個の首輪が作動していて、更に5個目の作動が2日と23時間の時点よりも前に起こっている。

J 「ゲーム」の開始から24時間以上行動を共にした人間が2日と23時間時点で生存している。

Q 2日と23時間の生存。

K 『A』、『10』、『J』、『Q』のPDAの取得。

ルール3には首輪は初期配布されたPDAでないとは解除できないことが、ルール9には全てのPDAの解除条件が書かれていた。なるほど、確かに読み上げるには少々長いかもしれない。

「ありがとう。だが、PDAは人に手渡さない方がいい。盗られたり、最悪の場合は壊されたりするかもしれないぞ」

「そ、そっか。そうなら大変だね。うん、次からはそうする」

オレにそうされるかもしれないと危惧したのか、千鳥は差し出したオレの手の中から素早くPDAを抜き取った。

「それと、オレの方に書かれていたルールだが、千鳥と違うのは5と7だな」

オレはその2つを読み上げる。

「ふーん、開始から6時間経つまでは戦闘禁止で、進入禁止エリアっていうのがあって、2日目からそれがどんどん下から迫ってくるのね」

「そういつことだな」

「それで、これからどうしよっか？」

「オレはルールを全部知るために、まだ会っていないプレイヤーに接触しようと思う」

「じゃあ私もそれについて行っていい？」

「オレにPDAを盗られたり、殺されたりしてもいいというのなら構わないが」

「・・・そんなことするの？」

「切羽詰まったら人間何をするかわからないからな」

「そんなこと言ったら誰とも一緒に居られないよね」

「そうだな。裏切られるのが怖いのなら1人で行動することだ」

「なら、私は村崎君と一緒に行くよ」

何が、なら、なのかは全く分からなかったが、どうやら千島はオレと行動を共にすることにしたらしい。

「そうか、じゃあ行くでしょう。6時間経つ前にできるだけルールを把握しておきたいからな」

そして、オレたちは他の参加者との接触を図るために、まだ進んでいない方へと歩き出した。

だが、その後は誰とも会おうことなく、とうとう開始から6時間が経ってしまった。

ピロリン ピロリン ピロリン

「あれ？ なんだろう？」

オレと千島のPDAが同時に鳴る。

「・・・メールが来たのか？」

画面では、メールのマークが点滅していた。試しにそれに触れてみると、メールが開かれた。

『ゲームの開始から6時間が経過しました。これより戦闘禁止エリア以外での戦闘を許可します』

「・・・始まっちゃったね」

「そうだな・・・。ここからは本当に何でもありだ。もし一緒に行動するのが怖くなったのなら、ここで別れよう」

「うっん、大丈夫。村崎君はきつとそんなことする人じゃないよ。私の勘がそう言ってる」

「ふん……。随分と当てにならない勘を持っているんだな」

「え……。？」

千島がオレの襲撃に備えてか、一步下がる。もっとも、戦闘の素人がそんなことをしても無駄なのだが。

「オレには目的がある。そのためには人殺しもする。逆に殺されるかもしれない。オレについてくればそういう血の惨劇を見ることになるだろうが、それでもいいのか？」

「……。そうなんだ……。うん、大丈夫。そうなりそうになっただけから逃げるから」

「逃げられればいいがな……。まあいい、オレは別にお前がついてきても何の支障もないんだ。このまま行くか」

「うん……。さすがにこんな建物の中で1人なんて、怖いよ……」

返事後の声は小さすぎてオレには聞こえなかった。

「ん、何か言ったか？」

「うっん、なんでもない。それより、これからもまだ1階を歩くの？」

「それもそうだな。そろそろ2階に上がってもいい頃か」

ゲーム開始から6時間も経てば、2階以上にいる人物が多くて不思議はない。多ければ半数以上が既に2階に上がっているだろう。

「よし、2階へ行くことにしよう」

「うん、わかった。じゃあ、一番近くにある階段は……っと、なんかバツ印がついてるけど、これって大丈夫かな？」

それを聞いて、オレは開かれたままだったメールを閉じ、代わりに地図を開く。

「ちょっと待て……、そうだな、仮にここが通れなかったとしても、近くにバツ印の付いていない階段があるから、確認のために行ってみる価値はあるかもな」

「じゃあそうしよっか」

そう言つて千島はオレの前を歩き出す。……実に無警戒だ。オレに後ろから殴り倒されるとは微塵にも思っていないのだろうか？

そんなことを思いながら、オレは千島の後について行った。

「ねえ、村崎君のPDAってなんなの？」

階段へ向かう途中、いきなり千島がそんなことを訊いてきた。

「・・・お前は馬鹿か？ そんなもの、教えるわけがないだろう」

「そうかなあ？ 私のは別に言ってもいいんだけど」

それは解除条件が楽な者の言葉であり、オレのように解除条件が厳しい者は、わざわざ公開して不利になるうとは思わない。

「じゃあ言ってみろ」

「そしたら教えてくれる？」

「そんなことはない」

「じゃあ言わない」

「結局言えないんじゃないか」

「そんなことないよ。ただ、私だけ教えるのはなんかなーって思っただけ」

「要は自分の解除条件を教えることで、相手のそれを聞き出したいんだろう？」

「そういうわけじゃないんだけど、なんか私だけ言うのって損した気分だもん」

「そういうものか？」

「そういうものの。ところで、バツ印っていうと、なんだろう・  
・、封鎖されてるとか、近付くと危ないとか、そんなイメージがあるよね」

「そうだな。おそらくそのどちらかなんだろうが、後者なら、階段は封鎖されていないかもしれない。もしそうなら、そこに仕掛けてある罠などの危険さえ取り除くことができれば、通ることができるかもな」

「でも、わざわざそんな危険を冒してまで通ることないよね。近くにまともな階段があるんだし」

「ここはそうだがな。だが、他にもバツ印のついた階段はあるだろう。ほぼ対角線に位置する階段などを通れるようになれば便利なのに、これはそこだけに限らないが、他のプレイヤーに待ち伏せされにくい」

「あ、そっか。地図上では通れない場所ってなってるから、人が来ないんだ。じゃあやっぱりまともな階段を上らないとね」

「・・・なんでそうなるんだ？」

「だって、他の人たちに会うのが目的なんですよ？」

「それはそうだが、ゲーム開始から6時間が経った以上、相手が攻撃を仕掛けてこないとも限らないんだぞ？」

「でも、仕掛けてこないかもしれないよね。そんなのはまず1回会ってみたいと分かんないし。ものは試しだよ」

「その1回で殺されなければいいがな」

「大丈夫だつて。私、けっこう逃げ足は速いから」

そこでオレは、ようやくオレと千島の持っている情報に大きな差があることに気付いた。

「・・・そうか、千島は知らなかったな」

「え？ なにが？」

「このゲームはなにも素手だけで戦うわけではない。刀もあれば弓もある。拳銃には銃まで存在する。それらから逃げ切るのは、はっきり言って無理だろう」

「・・・」

「それでもまだ、どんな奴とでもまずは話してみようと思うか？」

オレはそう質問したが、千島から返ってきたのはそれに対する答えではなく、オレへの質問だった。

「・・・ねえ、村崎君はなんでそんなにこのゲームに詳しいの？」

（しまったな、少々喋り過ぎたか・・・）

とはいえ、今更言ったことを訂正したり取り消したりはできない。

「・・・前に、このゲームに関する情報をたまたま拾ったことがあってな、それで知ったんだ」

結果、本当のような嘘のような曖昧なことを言っでごまかすことにする。だが、千島はオレのそんな曖昧な回避を許さなかった。

「でも、さっきの村崎君の口調はまるで実際に経験したことがあるみたいだったよ。ルールも全部本物だって思って、それを全然疑ってない。確かに首輪やPDAはあるけどさ、それだけで全部本物だって決めつけちゃうのはどうなのかな。書かれてるのは常識では考えられないようなことばかりなのに。普通ならそんな情報はただのデマだって笑い飛ばすくらいじゃない？」

子供だましは一瞬で核心を突かれ、あっけなく砕け散る。仕方なくオレは信じてもらえるもらえないは別にして、本当のことを話すことにした。

「・・・経験したことはない。だが、本当だと信じるに足る要素を、オレは持っている」

「それって何？」

「家族が、オレの兄貴がゲームに参加したことがある。その時に兄貴が撮った写真も見せてもらった」

「つ・・・でも、そんなのただの他人の言葉だし、写真だってどこか他のとこで撮ったものかもよ？」

「確かに、お前にとってはなんてことないただの他人の言葉かもし

れない。だが、オレにとつては他でもない兄貴の言葉だ。そして、オレは兄貴が決してこんなたちの悪い冗談を言うような奴じゃないということをよく知っている。写真の方は何とも言えないな。だが、そこに入っていた日付は間違いなく兄貴が修学旅行に行っていたはずの日だった」

・・・まあ、これは日付をずらしたカメラがもう1台あればできないことはないが。

「でもっ・・・」

「別に千島にもこれを信じろと言っているわけではない。自分が目にしたものだけを信じ、周りの言動に流されないのも素晴らしいことだとオレは思う」

「・・・じゃあ、このゲームが本物だってわかったら、村崎君のことを信じてあげる」

「そうか。だが、これらの話は全て作り話で、実は組織の関係者だったりするかもしれないぞ?」

「もし村崎君が本当に組織の関係者なら、そんなこと言わないよね」

「そうかもな。・・・いつまでもここで話していても仕方ない。オレは行くぞ」

そう言って、オレは千島の横を抜けて、目的地へと向かう。

「あ、待ってよ! 私も2階までは絶対ついてくってば!」

なんだかんだ言っておきながら、結局千島はオレについてきた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9208x/>

---

シークレットゲーム ~ subversive elements ~

2011年10月26日06時15分発行